

## 第6章 考 察

### 第1節 耕地谷古墳群における墓壙内破碎土器配置

#### 1 棺周囲への土器破片の配置行為

耕地谷1号墳SX101では、木棺の裏込め土上面から土器の破片が検出された。整理作業の結果、これは1個体の鉢<sup>1)</sup>を割ったものであることが確認された。近畿地方北部では、このような土器を割って木棺の裏込め土上面や棺蓋上にその破片を置く行為が、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期に認められる。

こうした行為は、棺の周辺に土器を置くことが少ない弥生時代墓制にあって特異なものであり、これまでにも近畿地方北部の弥生時代墳墓における特徴的な儀礼的行為として注目され、「墓壙内破碎土器供獻」<sup>2)</sup>もしくは「墓壙内破碎土器配置」<sup>3)</sup>などと呼ばれ、研究が進められてきた。これまでの研究では、近畿地方北部に集中的に分布すること、器種としては甕や水差し形の壺<sup>4)</sup>など煮沸用器種を主に使用するという選択性が認められること、そして出土土器には外面にススが付着するものが多いことなどが判明している。また、こうした器種の選択性や使用痕などから、単に土器を割って置く行為ではなく、その背後には葬送儀礼に関わる食物などの煮沸行為があった可能性が指摘されている。

#### 2 墓壙内破碎土器配置の盛衰

墓壙内破碎土器配置の初現は、弥生時代中期後半にある。近畿地方北部の中でも丹後地域の奈具墳墓群や寺岡遺跡SX56などで中期後半の例が認められるが、例は少ない。その後、弥生時代後期初頭には一気に但馬地域や丹波地域にも広がり、水系を越えて近畿地方北部全域にわたって盛行する。後期後半には、北陸地方の福井県小羽山墳墓群などにも例が見られる。

弥生時代後期に盛行した墓壙内破碎土器配置が確実に終焉への動きを見せ始めるのは、弥生時代終末期～古墳時代初頭である。弥生時代後期後半までは近畿地方北部のほぼすべての墳墓・墳墓群に墓壙内破碎土器配置を行う埋葬施設が含まれており、墓域内での執行率<sup>5)</sup>も高かった。しかし、弥生時代終末期には墓壙内破碎土器配置が確認できないものも増えてくる。そして、墓壙内破碎土器配置が見られる墳墓・墳墓群においても、それが行われている埋葬施設は少数派となっているのである。

その後、古墳時代に入ると墓壙内破碎土器配置の事例は急激に減少する。古墳時代初頭<sup>6)</sup>まではまだ確実に墓壙内破碎土器配置と捉えることのできる事例が存在しているが、その後はほとんど確認することができなくなる。但馬地域では、古墳時代前期前半まで下る可能性があるものは源氏山7号墳や見藏岡2号墳などが挙げられるにすぎない。古墳時代前期後半にも墓壙内破碎土器配置と思われるものが認められるが、それらの事例には後述するように行為内容にかなりの変形が見られるため、墓壙内破碎土器配置に含めてよいかどうか疑問が残る。したがって、現状では墓壙内破碎土器配置は古墳時代前期前半のうちに終焉を迎えているとみてよいだろう。

耕地谷1号墳は土器がSX101の鉢1点のみしか出土しておらず、明確な時期を把握しがたいが、副葬されていた管玉・鉄鎌の形態や、耕地谷2号墳から出土した土器などを参考にすれば、古墳時代初頭～前期前半に営まれた可能性が高いものと思われる。時期的には墓壙内破碎土器配置が終焉を迎える時期にあたっており、SX101の事例はその具体的な様相を考える上で貴重な事例であるといえる。

### 3 終焉の具体相

これまで、墓壙内破碎土器配置の終焉については、先に見たような一連の盛衰の中で事例の減少といった事象として取り上げられており、その内容の変化などについて特に取り上げられることはほとんどなかった。そこで、どのように墓壙内破碎土器配置が衰退し、消滅していったかについてもう少し具体的にみてみたい。

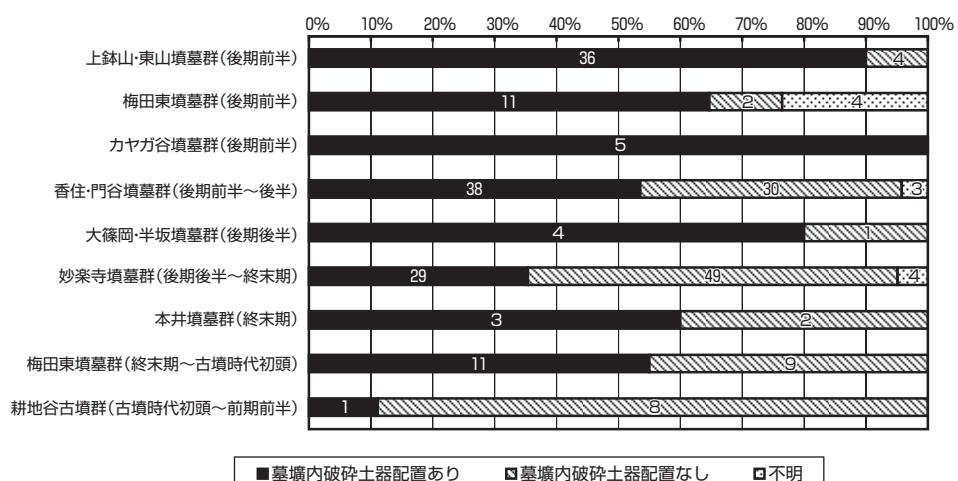
#### 事例の減少

まず、弥生時代終末期に見られる変化は、墓域の中で墓壙内破碎土器配置の執行率が急激に低下していくことである(第13図)。弥生時代後期前半にはいずれの墳墓・墳墓群でも執行率はほぼ100%に近かつたが、後期後半には徐々に執行率低下の兆しが見え出す。そして、終末期にはそれぞれの墳墓・墳墓群の中で墓壙内破碎土器配置が行われる埋葬施設は少数派となるくらいにまで執行率が低下する。弥生時代終末期にも墓壙内破碎土器配置自体はまだ多くの墳墓群において確認できるため、分布状況としては多くの事例が存在しているようにみえるが、墓域の内部で見れば、実際のところかなりの執行率の低下が認められるのである。ただし、墳墓・墳墓群によって執行率に偏差が認められることは注意される<sup>7)</sup>。

これまで、古墳時代前期段階の執行率については良好な事例が少なく不明であったが、耕地谷古墳群ではその一端を窺うことができる。耕地谷古墳群の場合、土器棺や不明遺構を除けば1号墳と2号墳合わせて9基の埋葬施設が調査されたにもかかわらず、墓壙内破碎土器配置が行われていた埋葬施設はSX101の1基のみであった。このことは、墓壙内破碎土器配置を行うことは、耕地谷古墳群の造営集団の中ではすでにイレギュラーであったといえるような状況となっていたことを示す。

#### 器種の変化

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期には、使用される器種にも変化が生じる。使用される器種としては、最盛期である弥生時代後期前半には煮沸用器種の甕と水差し形壺が基本であり、それにごく少数の高壺などの供膳用器種が伴う場合が認められるような状況であったが、弥生時代後期後半には、高壺・器台などの供膳用器種や、壺でも煮沸に用いるものではないようなものが伴う事例がやや目立つようになる。そして、それが弥生時代終末期になると急激に顕在化してくる。したがって、相対的な煮沸用器種の占める比率の低下と、器種組成の多様化がみられるのである。さらには、少数例ながら器台や高壺などの供膳用の器種が単体で使用される例も見られるようになる。



第13図 墓壙内破碎土器配置の執行率

また、使用される器種の地域色もしくは造墓集団ごとの独自色もやや明瞭化するように思われる。但馬地域では、南但馬の梅田東墳墓群で鉢が使用されている例が目立つが、北但馬でも本井墳墓群などで鉢の使用例が認められる。それに対して、丹後・丹波地域では鉢の使用はほとんど認められない。

古墳時代前期においては事例が少ないが、前期前半にはまだ煮沸用器種に対する選択性が認められるようである。耕地谷1号墳SX101については鉢を使用しているが、これは先に述べたような但馬地域における地域色を反映したものであろう。ところが前期後半になると、京都府白米山西2号墳のように鼓形器台のみを破碎して棺上に置いている事例も認められ、煮沸用器種を使用するという原則が完全に崩れる。また、高坏を棺付近に完形で置いている事例などもある。このように、すでに墓壙内破碎土器配置の系譜を引くものなのかどうかすら曖昧になってきている。

#### 煮沸痕跡

先に述べたように、墓壙内破碎土器配置が葬送儀礼に関わる何らかの煮沸行為を伴うものと考えた場合、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて煮沸用器種の占める比率が低下することは、その煮沸行為自体にも変化が生じていたことを示している可能性が高い。

それを象徴的に示すのが、耕地谷1号墳SX101で用いられていた鉢である。鉢であること自体がすでに煮沸用器種というよりは供膳器種とみられるのであるが、鉢を煮沸に用いる例も当該期の土器使用の中では頻繁に認められる。しかしながら、SX101出土の鉢には、ススは付着していないようである。したがって、煮沸に用いられたとは考えにくいのである。こうした点からは、古墳時代初頭前後には墓壙内破碎土器配置の背後に存在した葬送儀礼に関わる煮沸行為自体がすでに変質を遂げつつあったものと考えられる。葬送儀礼において煮沸行為自体が行われなくなったかどうかは不明であるが<sup>8</sup>、少なくとも墓壙内破碎土器配置と煮沸行為との間に分離が生じたことを窺うことはできるのではなかろうか。

#### 終焉にむけての流れ

このようにみると、墓壙内破碎土器配置の終焉の兆しは、執行率の低下や、使用器種の多様化などの行為内容の乱れという形で弥生時代後期後半から終末期にかけて漸移的に現れてくるものとみることができる。こうした様子からは、弥生時代後期前半には葬送儀礼のなかでも大切な儀礼的行為であり、行なうことが当たり前であった墓壙内破碎土器配置が、世代を重ねるにつれて徐々にその意味を失って伝統的な風習とでもいうべきものへと変質していく姿が想像される。

しかしながら、終焉を迎えるにあたっては、その執行自体が急激に途絶していく古墳時代初頭から前期前葉に大きな画期があったようである。こうした画期の存在は、墓壙内破碎土器配置が前代からの漸移的な変質の末に終焉を迎えたのではないことを示しているものと考えられよう。衰退の一途をたどりながらも存続していた墓壙内破碎土器配置が急激に行われなくなっていく背景には、古墳時代へ向かう大きな社会の変化が想定されるのではなかろうか。近畿地方北部では前方後円墳の築造は古墳時代前期中葉をもって開始されるようであるが、それに先行して京都府大田南5号墳など従来の墳墓とは埋葬施設や副葬品の点で一線を画する古墳が築造されており、この時期の墓制における変化を窺わせる。

## 4 耕地谷1号墳SX101について

以上に述べてきたような過程をたどって墓壙内破碎土器配置は終焉を迎えるが、問題となるのは、墓壙内破碎土器配置が終焉を迎える古墳時代初頭から前期前半の時期に墓壙内破碎土器配置を行っているごく少数の事例をどのように考えるのかという点である。

近畿地方北部全体において墓壙内破碎土器配置という儀礼的行為がほとんど失われている中で、ごく少数の被葬者に対してのみ行われていることは、この時期の墓壙内破碎土器配置の執行の有無は造墓集団ではなく、被葬者の性格によって決定されていた可能性が高いことを窺わせる。盛行期の様相の検討に加えて、こうした衰退・消滅期になおこの儀礼的行為を保守している事例の検討を行うことで、より墓壙内破碎土器配置の本質的な部分に迫ることができるのでなかろうか。

### SX101の検討

さて、こうした視点から耕地谷1号墳SX101の例についてみていきたい。

まず注目しておきたいのは、耕地谷1号墳にはSX101で墓壙内破碎土器配置が行われているのに対して、2号墳では墓壙内破碎土器配置が全く確認されていない点である。

1号墳と2号墳は同一尾根上に隣接して築造されており、両者の間には強い関係性が窺われるが、埋葬施設配置の違いが明瞭に認められる。1号墳の埋葬施設配置を見た場合、そこに中心埋葬と呼べるもののが認めがたい。墓壙規模や副葬品の点からみても、比較的等質的な構造であるとみることができよう。これに対して、2号墳では中心埋葬が比較的明確である。位置や墓壙規模、副葬品などからみて、SX201が中心埋葬として把握できる。

このように、墓壙内破碎土器配置が行われている埋葬施設を含む1号墳と含まない2号墳との間に、埋葬施設配置における差異が現れている点は注意してよいだろう。1号墳にしてもSX101のみでしか墓壙内破碎土器配置が認められないため、これがイレギュラーなものであった可能性もある。ただし、盛行期には被葬者ほぼ全員に対して行われることが通有であるという等質的な性格を持っていた墓壙内破碎土器配置が、中心埋葬が顕在化していない1号墳にのみ見られることには、何らかの意味があると考えてもよいのではなかろうか。

造墓時期については、1号墳出土の土器がSX101の鉢しかないために微妙な部分もあるものの、両者がほぼ同時、もしくは2号墳が1号墳に遅れて造営されたものと思われる。もし1号墳と2号墳がほぼ同時に営まれていたならば、集団の構造を異にするような2つの集団が併存したこととなり、その集団間で墓壙内破碎土器配置を存続させていたかどうかの違いがあった可能性が考えられる。一方、2号墳が1号墳より後に営まれたものである場合には、墓壙内破碎土器配置が行われなくなる背景の一つに、この中心埋葬を顕在化させるような造墓集団における変化が存在していた可能性が考えられよう。いずれにしても、墓壙内破碎土器配置が集団内の階層化の進展にはそぐわないものであったことを窺うことができるのではなかろうか。

そして、1号墳という単位で見た場合には、墓壙内破碎土器配置を行っているSX101が唯一玉を副葬しており、残り2基の埋葬施設では鉄製品を副葬している点も注意される。2号墳を含めても耕地谷古墳群の中では墓壙内破碎土器配置と玉類副葬の両者がともにSX101にしか認められないことからは、この二者の間に何らかの相関関係があることも考えられる。ただし、古墳時代前期の他の事例を見た場合、特に玉類副葬との相関関係があるとはいえない。現時点では、墓壙内破碎土器配置を行うという点で他の被葬者と区別されていた被葬者が、副葬品目の選択という点でも区別されていた可能性を指摘するにとどまる。しかしながら、当該期の墓壙内破碎土器配置の執行の有無が被葬者の性格によって決定されていたことを補強する材料とはなるものと思われる。

### 他集団との交流

さて、以上のようなSX101の墓域内における位置づけのほかにも、やや大きな目で見た場合、鉢とい

う器種の選択にも注意しておく必要があろう。

先に墓壙内破碎土器配置に鉢を使用することが但馬地域の地域色として捉えられる可能性を指摘したが、SX101の例もそれを補強するものである。ただし、梅田東墳墓群のように墓壙内破碎土器配置における鉢の使用例が特に目立つ南但馬の墳墓群の存在を考えた場合、こうした墓域を営んだ集団との交流も想定できるかもしれない。被葬者の出自や親族関係などについても、古墳時代前期前半の墓壙内破碎土器配置の単発的な執行に関わっていた可能性の一つとして考慮に入れておく必要があろう。

## 5 小 結

小考では、墓壙内破碎土器配置が衰退し終焉していく過程を概観し、耕地谷1号墳SX101のような衰退・終焉期の事例の検討から墓壙内破碎土器配置の性格や当該期の社会の変化などを考えるための手がかりを得られるのではないかといった見通しについて述べてきた。十分な検討を行っていないため結論めいたものは提示できず、雑駁な文を連ねてきたように思う。

ただ、弥生時代に限らず、地域的もしくは時期的に特徴的な祭祀や儀礼的行為が認められる場合、その検討にあたっては開始から盛行にかけての様相が注目されることが多いように思う。一方で、こうしたもののが事象的にどのような経緯をたどって終焉を迎えるのか、また、終焉という現象の裏にどのような社会的背景が潜んでいるのかという点にはあまり注意が払われていないようにも思う。祭祀や儀礼的行為に限ったことではなく、遺物・遺構の検討においても同様の傾向があろう。それぞれの事象の衰退や終焉の過程を考古学的に明らかにしていくことで、より詳細に当時の社会について知ることができるのではなかろうかというのが、耕地谷1号墳SX101の事例に触れての感想である。

### 註

- 1) 壺である可能性も指摘されているが、土器自体の形態のほか、墓壙内破碎土器配置で壺が用いられる場合には口縁部の破片が選ばれて置かれていることが多い点などから、鉢と考えてよいと思われる。
- 2) 松井1991、肥後1994。
- 3) 石井2003。現在、一般的には「墓壙内破碎土器供献」の語が用いられているが、小文では石井2003に基づき「墓壙内破碎土器配置」の語を使用する。
- 4) 近畿地方北部の弥生時代後期の水差し形の壺は容量が壺に近く、集落出土のものにもススなどの煮沸痕跡が残るものが多いため、煮沸用に用いられることが多かったと思われる。
- 5) 墓域に存在する埋葬施設（発掘調査が行われたもの）の中に、墓壙内破碎土器配置が認められる埋葬施設がどのくらい含まれているかという割合を執行率と呼ぶ。便宜的に数値として示す場合には、（墓壙内破碎土器配置が認められる埋葬施設数 ÷ 調査された埋葬施設数 × 100）で示される。
- 6) 土器様式では、近畿地方の布留式初頭に併行する時期と考える。近畿地方北部では土器様式に山陰地方の影響が急激に目立ち始める時期である。
- 7) 例えば、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて営まれた京都府内和田墳墓群では15基調査された埋葬施設のうち墓壙内破碎土器配置が確認されたものは1基であり、執行率は7%にすぎないが、兵庫県上ノ段墳墓群では5基調査された埋葬施設のすべてで墓壙内破碎土器配置が確認され、執行率は100%である。
- 8) 墓壙内破碎土器配置に代わって認められるようになる墓壙上土器配置にも、少数ではあるが壺などの煮沸用器種が含まれる例が認められる。煮沸行為に用いた土器の処理形態に関して変化が生じたと見ることもできるかもしれない。

### 参考文献

- 石井智大 2003「北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」『香住門谷遺跡群』 豊岡市文化財調査報告書第34集 豊岡市教育委員会  
奥村清一郎ほか 1988『寺岡遺跡』野田川町文化財調査報告第2集 野田川町教育委員会  
柏原正民ほか 2003『カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡』兵庫県文化財調査報告第259冊 兵庫県教育委員会

- 河野一隆 1995「2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 瀬戸谷皓ほか 1992『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第26集 豊岡市教育委員会
- 瀬戸谷皓ほか 2002『妙楽寺墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第32集 豊岡市教育委員会
- 肥後弘幸 1994「墓壙内破碎土器供献（上）・（下）」『みづほ』第12・13号 大和弥生文化の会
- 肥後弘幸 1996「弥生墳墓における土器供献－丹後の場合－」『YAY!』弥生土器を語る会20回記念論集 弥生土器を語る会
- 松井敬代 1991「破碎土器の埋納について－豊岡市神美地域を中心として－」『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会
- 松井敬代ほか 1997『見藏岡遺跡 その二』竹野町教育委員会
- 野島永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（1）」『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島永・野々口陽子 2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（2）」『京都府埋蔵文化財情報』第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山田清朝ほか 2002『梅田東古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第241冊 兵庫県教育委員会